

＜福島訪問記＞10月12～14日福島市で開催された地域民主教育全国交流研究会に参加しました。「福島で開催することの意味は何か?」「福島の我々は何を学べるのか?」など、重い問いかけを受けての3日間でした。印象的だったことのいくつかを紹介します。

## 「測って食べ、測って遊び、測って暮らす」福島市さくら保育園にて

12日に最初に訪れた私立さくら保育園では、園児の健康を守るために立命館大学名誉教授の安齋育郎先生の協力を得て、放射線の正しい認識を職員と保護者が共有して保育を行っていることを園長先生が話してくれました。右の写真中央にあるのは同園が導入した放射線測定機です。鉛でできているので重量は700Kgもあります。福島市では食材をカットして測る測定機には260万円程度の補助金がでますが、それでも300Kgほどあり、床が設置に耐えられなくて置けない園があります。写真の測定機は補助の指定機種でないという理由で補助金が出ず、園は借金を背負いました。この測定機が優れているのは食材を細かくカットせずに測れるところです。そのため食材だけではなく、園児の遊びに使うザリガニやドングリもそのまま測定できます。保育園では生き物や木の実などをよく使うので、この測定機は安全な食材のためだけでなく、遊びの安全性を確保するためにも役だっています。指定機種にとらわれて補助金を全額出さなかった行政の姿勢に疑問を持ちました。この他にも、運動場と道路の側溝の間に水が入ったペットボトルを並べ、側溝



からの放射線を防いでいるなど保育士さん達の細かな努力に感銘を受けました。(初めて知ったのですが、放射線を防ぐために宇宙飛行士の服にも水が入っているそうです。)



## 仮設住宅自治会の方々との懇談

12日の最後は各地から避難してきた方々が住む仮設住宅に伺いました。チャーターバスの運転手が道に迷い(仮設住宅は地図に載っていない)到着が2時間近く遅れたにもかかわらず、新旧自治会長さんと7人の班長さん達が待っていてくれました。現地の方々は原発事故の処理の見通しがたたない中、「もう語りたくない」というのが本音です。今回の訪問は避難者支援をずっとしてきた方とおしての依頼なので受けてくださったのでした。原発爆発以後、何度も避難先を変えられ(普通で5～6回、多い人は十数回)、今も続く本当に大変な状況を語ってくれました。特に、仕事を失って家族がバラバラに生活をせざるをえないこと、避難先が分散しているのでスクールバスで毎日通学する子どもの大変さ、転校に転校を重ねて学校毎の学習進度が違うことによる学習の困難、将来の見通しが持てないことによると思われる「荒れ」など、生活と子どもの教育に関する悩みが(私は言葉の背後に「怒り」を感じました)語られました。話を聞かせていただいた私達がなすべきことは何かを考える、とても重い一時間でした。

## 「フクシマは終わっていない」

13日の全体集会では福島教師のグループ「なごみ〜ず」による「フクシマは終わっていない」という歌の披露がありました。この歌は「愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団」によっても歌われています。1番のみ掲載します。

フクシマは終わっていない

原詩 佐藤 香 作詞 なごみ〜ず・山口直子

1 時がたち 前より確かに線量は下がった  
それでもまだ東京の数倍から10倍以上  
除染した場所も 山から雨で流されてきてまた上がる  
除染作業は仮置き場が決まらなると進まない  
仮置き場の決定は町内会に任せられる  
結局最後はそれぞれの家庭で自己責任  
フクシマは終わっていない フクシマはまだ終わらない



歌を聴きながら前日の仮設の人達の話がだぶりました。4番の「地域も家庭も人の心も引き裂かれた」という歌詞が重いです。昨年7月の聞き取り調査では聞けなかった言葉「福島は一つというけれど、地域によって、人によって意識は違う。それぞれの意見を聞いてください。」人によって考え方が違うのは当然だけれど、何か割り切れない思いが残ります。



この写真は体育館に作られた中学校の仮設の教室の様子です。上から丸見えで密接しているから、隣の教室の音は丸聞こえだと思います。こんな困難な学習条件のなかでも、全国学力テスト対策を強かに推し進め、「確認テスト」を毎月のように強<sup>い</sup>く教育行政の姿勢に現場の教師達は憤<sup>い</sup>っています。

## 「ぞうれっしゃ」の学習から東山動物園への修学旅行

重い現地の報告が続くなかで、小学校6年生13人の修学旅行の話は元気が出てくるものでした。『ぞうれっしゃがやってきた』を学習した子ども達は「東山動物園に行ってみたいな。」という思いを持ち始め、「じゃあ、ぞうれっしゃを走らせよう。」という教師の呼びかけで始まった修学旅行です。この絵本の原作者・小出隆司さんや合唱構成「ぞうれっしゃがやってきた」の作者・藤村記一郎さん、近隣の「ぞうれっしゃ合唱団」のメンバーなどが協力し、13人の子ども達のホームステイによる旅行が実現しました。6年生のある子どもは「13人の子どものために100人以上の大人が動いてくれた。」という感想を述べていました。「支援されるだけでは子どもの自尊心がなくなる。」と考えた大谷先生は自分たちの要求を実現するための活動を考えさせます。そして子ども達の夢を実現するために、子ども達に寄り添う大人達一ぞうれっしゃを走らせるきっかけを作った東京台東区子供議会の活動の真髓を福島の子どもはつかんだようです。

<研究会のご案内> 三重フレネ研究会 10月19日(土)午後3時半～6時

澤崎さん「発達障害について」 津市・三重大大学教育学部にて

ほぼ毎月、三重大教育学部(津市)を会場にこじんまりと30年間開催されています。子どもを主人公にした学校づくり、個人学習と共同学習を調和させた学習改革を1930年代から展開しているフレネ教育を、日本の自分の現場で発展させる研究会です。参加費無料